



墓地のほとり



—There was a Man

Dwelt by a Churchyard—

墓地のほとり

御承知の、シェークスピアの作品中で、もっともいい子であるマミリアス「喜劇“冬物語”に出てくる早熟ではあるが可憐な子供。シリール王レオンティーズと王妃ハーマイア二の間に生まれた小王子。母の無実の罪を悲しむのあまり死す。」が、母なる王妃と侍女達に、スプライト地精やゴブリン悪鬼の話をはじめるところがある〔第二幕第二場〕。そこへ嫉妬に駆られた王が衛兵を引きつれてやって来て、王妃を牢獄へ送るのであるが、この地精や悪鬼のことは、話しかけになつたままで、その後間もなくマミリアス死んでしまうのである。

で、その話が、続けられていたら、どんなふうだったろう？というまでもなく、作者のシェークスピアならで知る由もないが、私は大それたことながら、その話を続けてみよう。べつに新味を見せようとする

のではない。それは諸君が、もつともありそうな事として聞かれた話、言われもした話の一つなのである。誰だってその話を、思いのままの形に仕立てることができると。が、私の話はこうなのだ。――

――ある教会の墓地のそばに、一人の男が住んでいた。彼の家は、下層が石造で、上層が木造だった。表の窓は往来をのぞき出し、裏の窓は墓地に面していた。その家は嘗ては教区の司祭の所有だった。しかし（これはエリザベス女王の時代「十六世紀の中頃から終まで」のことだったが）その司祭は結婚していたので、もつと部屋がほしかったし、その上、彼の妻は、夜寝室の窓から墓地の見えるのを、嫌がっていた。彼女は見たといった――だが、彼女がどんなことを言ったかは、お氣にかけられないでよろしい。とにかく、彼女はのべつに騒ぎたてるので、司祭もとうとう、村の通りの、ある大きな家へ引越すことにした。そしてそのあとへ、ジョン・プールというやもめ男がはいつて、一人で

暮すことになった。かなりの年輩だったジョン・プールははなはだ引っ込み思案で、いくらかケチな男だと噂されていた。

どうやらほんとうらしい噂だったが、彼は他方、たしかに病的な男だった。その頃は、夜、松明たいまつのあかりで埋葬を行うのが普通だった。そして、葬式が近かづくくと、ジョン・プールは、誰よりもよく見ようとするように、階下か階上の窓に立つのが常だった。

ある晩のこと、一人の婆さんが葬られることになった。彼女はかなり裕富だったが、この土地では嫌われ者だった。いつも言われていたことだったが、彼女は基督教徒ではなく、夏至祭「六月二十四日」だとか、万聖節「十一月一日」のようなお祭の晩に、家にいてお祈りをしていたことはなかった。彼女は血走った眼をしていて、それは見るも物凄かった。どんな乞食だって、彼女のドアをたたいて憐れみを乞わなかった。しかし、彼女は死にあたって、教会へ寄進の金を残して

いた。

彼女の埋葬の夜は、ひどい天候ではなかった。いやむしろ、美しくおだやかな天候だった。

棺舁きや松明持ちの賃金を、普通よりもずっと多くきばって死んだのだが、そうした役をする人を雇うことが、少々むずかしかった。屍体は棺なしで、毛布にくるまれたまま埋められた。ぎりぎり入用な人数だけしか、そこにはいなかった。―そしてジョン・プールは例のごとく窓からのぞき出していた。いよいよ墓に土をかぶせようとする時、牧師はかがんでなにか―チリンと音のするものを、屍体の上に投げた。そして低声に『なんじが金銭はなんじとともに滅ぶ。』と、言ったようだった。

それがすむと、牧師は急ぎ足に去った。葬儀に列した人達も去った。あとにはただ一人の松明持ちが、シヨベルで土を掻き入れる墓守とそ

の子を照らしていた。彼等は十分な仕事はしなかった。で、翌日、それは日曜日だったが、教会の参詣人達は、墓地にひどくゆるんだ墓があると言つて、ちよつと墓守を咎めた。墓守は自分で行って見たが、事実、彼がやったよりも、もつと悪い状態になっていると思つた。

ちよつとその時分、ジョン・プールは、半ばうれしげな、半ばいらしたなんだか妙な様子で、そとをうろついていた。一度ならず彼は、自分のいまの住居とはうってかわつてきれいな旅籠はたごに泊つた。そこで彼は、落ち合つた連中に、すこしお金にありついたので、もつといい家を探しているのだと、問わず語りに言つた。

『ふむ、そりゃあもつともさ。』と、ある晩、連中のなかの鍛冶屋が言つた。『わしだつてお前さんの住んでるあの場所は、好すく気にやあなれねえさ。ひと晩中のことを考げえるとな』

旅籠の亭主は、どんなことかと訊いた。

『うむ。なんだか、寢室の窓へ、誰か攀じのぼろうとしていてるーよ
うなのさ。』と、鍛冶屋は言った。『どうも腑に落ちねえ話だがーあの
ウィルキンス婆さんが埋められたのは、一週間前の今日だったかな？
え？』

『これ。お前さんは、人の心持ってもものも考えなくちゃいけないよ。』
と亭主は言った。『そんなことを言われちゃ、プール親方もいい気は
しないぜ。今そこはそうなんかね？』

『なあに、プール親方は気にしちやいなさらねえよ。』と、鍛冶屋が
言った。『親方は、あすここにやあ、ずいぶんながいこと住んでなすつ
たから、なにもかも御承知だあ。わしはただ、あすこが好きにならね
えと、言ってるだけのことさ。吊い鐘びつの音や、埋葬の時の松明たいまつや、そ
の二つで、墓は、誰もそばにいない時も、静かにねているものなんだ。
ただそこに光があるということだがープール親方、お前さんは一つ

も光を見たことはないかね?』

『ああ、見たことはない。』と、プールは、洗面つくつて言いながら、また一杯酒を注文した。そしておそく帰って行った。

その夜、彼が二階でベットに寝ころぶと、呻うめくような風が、家のぐるりに舞いはじめた。彼は眠ることができなかつた。

起きあがった彼は、部屋を横切つて、壁のちいさな戸棚へゆき、なにかチリンと音のするものを取り出して、それを寝間着の胸に入れた。それから窓に立って墓地を見おろした。

諸君は、教会堂にある、きょうかたびら経帷子を着了た人間の形の、古めかしいブラリス黄銅像を、御覧なされたことがありますか?それはあたまのてっぺんを、妙なふうにたばねられている。まあそれに似たような或るものが、墓地の、プールには十分おぼえのある地点から、スーツと立ちあがった。プールはベッドに身を投げて、息を殺した。

間もなく、“或るもの”は、窓扉を、いかにも力弱げに、ガタガタ鳴らした。恐ろしい嫌悪に駆られて、プールはその方へ眼をむけた。おお！彼と月光との間に、妙にたばねた頭をした黒い輪郭があつた……かと思うと、もうそのかたちは部屋の中にいた。

床板の上の、乾いた土は、カラカラと鳴った。低い、ひび割れた声と言った。『どこにあるか知ら？』——そして、やっとあるけるような、よろめく足どりで、ここかしこをあるいた。

ちらちら見る事ができたのだが、それは、部屋の隅々をのぞきまわったり、椅子という椅子の下へかがみこんだりした。とうとう壁の戸棚の扉をいじくりかけたかと思うと、ガタンと跳ね開ける音がした。つづいて、からっぽの棚を、長い爪でガリガリひっ搔く音——そのかたちは、ベッドのぐるりを飛びまわったが、一瞬立ちどまり、しゃがれた声で叫んだ。——『お前が、とつたのだね！』

——ここでシェークスピアのマミリアス王子（この王子は、この話よりもずっと短かい話をしただろうと筆者は思うのだが）ならば——並み居る侍女のうちの、いちばん年弱なのを目がけて、だしぬけにワツと叫んで飛びつく。その侍女もおなじく、あれえ！と叫ぶ。母なるハーマイア二王妃は、すぐ王子をつかまえて、噴き出したくなるのをこらえながら、きびしくゆすぶり、軽く打ってたしなめる。恥じて顔をあからめ、やや泣き出しそうになった王子は、早くもベッドへ送られようとする。だが、やっと驚きから気をとリ直した年弱な侍女のとりなしで、王子は、どうにか、いつもの寝る時間まで、そこにいることを許される——という段取りだったろう。

そして、その時間までには、王子もまた機嫌を取り直し、みんなに“おやすみ”を言いながらも、まだこれより二倍も恐ろしい話を、もう一つ知っているんだから、こんどの折には話そう——と笑う段取り

だつたらう。

【附記】

シェークスピアの“冬物語”第二幕第二場の終りは、こうなっている。――

王妃。お前は、なんたる賢いことじゃ。ここへおいで。母も聞こう。
さあそばへおかけ。お話をしておくれ。

王子。陽気なお話？ 陰気なお話？

王妃。いっとう陽気なのを。

王子。冬には陰気なお話が、いっとういい。

私には地精スプライトや悪鬼ゴブリンの話のお話があるの。

王妃。お聞かせ。それでいい。ここへ来ておかけ。おいで。そして
しっかりやって、この母を、お前の地精で驚かしておくれ。
お前は強い子だ。

王子。ある男が――

王妃。さあ来て、おかけ。それから？

王子。或る男が、教会堂の墓のほとりに住んでいました。――私は、
そうっとお話しましょう。そとの蟋蟀こおろぎに聞かれてはならない。

王妃。では、もっとそばへ来て、母の耳にそうっと言う方がよい。